

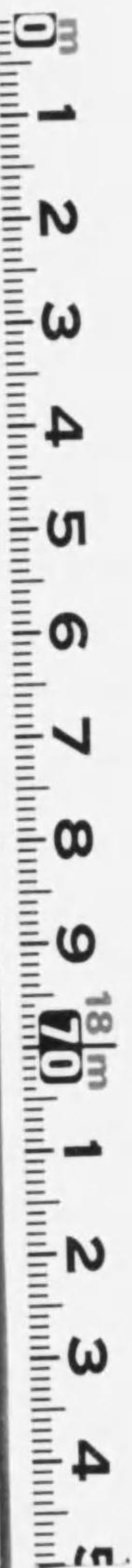
特249

919

今村奇男述

綿業大陸化の方法

経済雑誌
ダイヤモンド研究所



始



特 249
919

綿業大陸化の方法

大日本紡績株式會社
常務取締役

今村 奇男

過剩錘數の推算



我國には、現在（昭和十三年八月末）一二、二八八千錘の綿紡機がある。この内、
實際に運轉されてゐるのは、その六二%即ち七、六四〇千錘に過ぎない。残りの三割
八分四、六五〇千錘の紡機は、空しく休眠してゐるのである。

然らば、この休眠紡機は、何時になつたら運轉出来るやうになるのであらうか？
又、我國の綿製品需要を充足する爲には、この休眠機の全運轉が、絶體に必要であら
うか？



若し、この休鍾が、當分我國に於て、運轉される可能性がなく、又、我國市場の綿製品需要の點から見て、この休鍾を全部利用するまで、生産を増大する必要がないものとしたならば、これを何時までも我國に寝かして置くよりは、之を其のまゝ大陸へ移して活動せしむる方が、資本經濟の上から言つても、得策ではあるまいか。

先づ、我國の綿製品の消費力を、從來の實績によつて検討して見ると、次表の通りである。

即ち、我國の綿糸需給は、統計の明示するが如く、生産高の五割以上を輸出してゐるのである。

我國綿糸需給狀態 (單位欄)

	生産高	輸入高	綿糸輸出高	綿布綿糸製品輸出高	國內消費高
昭和六十年平均	三、一〇一、四五〇	五、四、八四一	六五、八八一	一、五四九、二四三	一、五四一、二二七
昭和十一年	三、六〇七、一九六	一四、一九一	一一〇、八三三	一、九二一、九二〇	一、五八五、五六二
昭和十三年	三、九六八、二六九	一〇、八七七	一二八、九〇八	一、八九〇、六九〇	一、九五九、五四七

綿糸輸出と國內消費の割合 (前表に依る)

	輸出	國內消費
昭和六十年平均	五一・一	四八・九
昭和十一年	五六・一	四三・九
昭和十二年	五〇・七	四九・三

前表に於ける内地消費の綿糸は、廣巾、小巾綿布の製織、メリヤス、タオル、手巾、シャツ等の雜貨、漁網、ベルト、タイヤ、フィルタークロス等の工業用品製造、及び他纖維と混用されて、織物や雜貨に使用されるのであるが、今回の綿業統制によつて、内地向綿製品は、軍需品及び特免品を除いて、純綿物の消費は出来ないことになつたから、内地向の綿糸供給は、從來より少くても、差支へない譯である。

今、現在の統制に基いて、綿糸の需給を推算して見ると、先づ、輸出の方は、圓ブロックを含めての綿布輸出を、從來より増加するものとして、三十億平方碼とする。この綿布製織に要する綿糸は、約百六十萬捆である。(本年八月の紡聯加盟織布兼營會社の綿布千平方碼當り原糸消費量二一〇・五封度に基いて計算す)次に、綿糸輸出を十三萬捆、綿製雜貨輸出を四十萬捆と見れば、輸出用綿糸の需要高は、合計二百十

三萬梱となる。

次は、内地向綿糸である。これは前表の通り、從來、二百萬梱に近い消費を示してゐるが、小巾綿布の全部、及び從來十五、六億碼の消費を示してゐる廣巾綿布の半ばを、ス・フを以て代へるとすれば、その原糸量約四十萬梱、軍需特免品、及び他纖維混織用として五十六萬梱（十月度生産計量に基く）を見込めば、内地向綿糸の需要高は九十六萬梱で、従前の三分の一に減ずる。

尤も、ス・フの生産の程度、その混用代用の限度如何によつて、國內への綿糸供給高は異つて來るが、茲では、軍需品特免品以外に、内地は廣巾綿布に五割のス・フ混用を認める事と假定したのである。

結局、輸出・内需を合せて、三百萬梱の綿糸生産が必要な譯である。而して、この綿糸を生産するに、どれ丈の紡機を動かせば好いのであらうか？

我國、現在の紡績會社生産綿糸平均番手は、二六・六番手（本年七月中）であるがこれは幾分高級化するものと見て、三〇番手として、一日一錘の出來高を、五〇匁と

して計算して見る。

一錘當りの一ヶ月出來高は、廿七日操業として一、三五〇匁、一年では一六、二〇〇匁、即ち〇・三三七五萬梱である。故に、三百萬梱の綿糸紡出には、一年に八百八十餘萬錘の紡機を運轉すれば好い譯である。

換言すれば、現在の設備の七割餘で足りるのであつて、三百四十萬錘、即ち全設備の三割足らずのものが剩つて來るのである。

更に、以上の計畫によれば、棉花の輸入をも節約することが出来る上に、對外勘定の改善も著しい良化が可能である。

三〇番手綿糸の一梱紡出の原棉所要量を三四〇斤とすれば、前記の綿糸生産の原棉の所要量は、一千二十萬擔である。一擔五十圓として、價格五億一千八萬圓である。

これに對し、輸出は、綿布一平方碼當り價格一九錢八厘（本年一―七月輸出價格平均）として、三十億平方碼では、五億九千四百萬圓で、これ丈でも既に受取勘定となる。それに綿糸、雜貨の輸出を加へれば、その受取勘定殘は、更に増加す可きことは

疑ひない。

勿論、廿七億碼の輸出さへ、その維持を危ぶまれてゐる現在では、三十億碼への輸出は、仲々實現困難の問題であるが、圓ブロック、就中、支那市場の確保が既定の事實となつた今日、かうした輸出の伸展も、決して夢想には終らないと信ずる。

以上の推算によつて、我が綿業は、ス・フを利用すれば、需給に餘り甚しい變化を起さずして、現在の生産設備の四分の一を他に利用出来ることが分るのである。

綿業大陸化の達成方法

隣邦支那は、世界有数の綿布消費國でありながら、綿業の生産力極めて低く、殊に今回の事變によつて、工場の破壊閉鎖等のため、その生産は一層低下した。しかも、我國よりの輸出は、制限されてゐる爲め、供給は愈々逼迫し、綿製品の市價は、異常な昂騰を示してゐる状態である。

更に、滿洲國に於ても、同様な現象を生じ、一般消費者は、生活必需品たる綿布の

市價昂騰に少からず悩まされ、綿業生産力の擴充は、當面の急務となつてゐる。

今、試みに、世界主要國の紡績錘數と、一錘當りの人口を比較して見ると、次表の通りである。

主要國紡績錘數及一錘當り人口 (一九三八年一月末現在)

國名	紡績錘數 千錘	人口 千人	一錘當り人口
英國	三三、三四〇	四九、九五八	一・三
米國	二六、六一一	一二七、九八〇	四・八
日本	一一、二九七	九九、八三五	八・一
印度	九、七六三	三七九、五〇〇	三八・八
支那	五、〇七一	四〇〇、〇〇〇	七八・八
獨逸	一〇、三三三	六七、一〇五	六・五
佛國	九、七八三	四一、九〇〇	四・二
世界總計	一四七、二一九	二、〇九五、四六〇	一四・二

(註) 錘數は萬國紡績聯合會の統計に依る。支那の錘數は一九三七年七月末現在とす。

即ち、支那の一錘當り人口は七八・八人で、世界最大を示し、裸の國と言はれる印度に比較しても、二倍強に當るのである。

この様に、支那は生産力が低いから、毎年大量の綿製品を輸入してゐるのである。

しかも、豊富な棉花資源を國內に有しながら、綿製品の不足に悩むと言ふことは、何としても不合理である。

今回の事變によつて、支那の紡績錘数は、約百四十萬錘を喪失した。現在の錘数は三百五六十萬錘である。しかし、支那の綿布消費力の現状及び將來の増加見込からすると、同國の紡績錘数は、一千萬錘程度まで増加するのが至當と考へられる。それには、事變によつて喪失した錘数を、一日も早く復舊せしむると同時に、我國に剩つてゐる遊休紡機を、そのまゝ移轉せしむるならば、支那に於ける綿業の生産力は、容易に擴充する事が出来る譯である。

即ち、我國の各紡績會社は、現在の所有生産設備の三割餘を、そのまゝ大陸へ移轉せしむべきである。又、遊休紡機数の少い小紡績會社は、相集つて一團となり、その三割餘の紡機移轉を行ふやうにするのである。

而して、紡機移轉と共に、セメント其他の建築材料も、一緒に持つて行つて工場を建設し、紡機の据付をすれば、正貨の流出は、賃銀の支拂程度に留まり、極めて僅か

で済む。従つて、我が國際貸借上にも、甚しい影響を與へずに済むと思ふ。

支那の綿製品需要の増大を見越して、某國は、既に紡績工場の建設を目論んでゐると傳へられる。今にして我國綿業が、大陸進出を行はないならば、結局、第三國が我に代つて、進出す可きは疑ひなく、わが綿業の大陸化は、挫折を餘儀なくされるのであらう。

現在の全支の棉花生産高は、平均千二百萬擔であるが、目下進行中の増産計畫が成功すれば、二千五百萬擔までの收穫は可能だと言はれてゐる。従つて、支那の紡機は一千萬錘に増加したとしても、原棉供給には聊かの不安もなく、進んで我國や、滿洲の原棉需要を滿たすことも容易である。

我國は、國策として、内地向はス・フ又はス・フ混紡品を使用せしめ、原則として棉花の輸入は、輸出綿製品の製造所要量の限度に留める方針を取つてゐる。

即ち、我が綿業は輸出産業としてのみ發展が許されてゐるのであつて、内地市場に關する限り、當分伸展は望み得ないのである。従つて、我が綿業今後の進路は、大陸

に求むるの外なく、又それが最も自然な方法である。

嘗て英國は、世界最大の綿業國として、その威を世界に誇り、ランカシャーグッズは、全世界を席卷するの優勢を持してゐたのであるが、わが日本に於ける綿業の發展によつて、その覇權は脆くも打破られ、僅かに高級綿製品の供給者として、昔日の餘喘を保つてゐるに過ぎない。これは、綿業のやうな輕工業は、英國の如き生活程度高く、勞銀不廉な地方に於ては、その存立が不適當となつた事を示すもので、代つて、我國が、綿業の適者として登場した譯である。

然るに、最近、綿業に於けるこの地域的移動現象は、更に我國と印度、支那との間にも生じ、下級綿布の生産は、次第にこれ等諸國に盛んならんとする状態を示してゐる。

我國の産業機構が、輕工業より次第に重工業、化學工業へ轉移しつゝ、ある事は、周知の通りであるが、わが綿業も亦、この經濟的發展に應じて、漸くその方向を轉換すべき時期に當面した譯である。今後、國內綿業は、高級綿製品生産に對し、その機能

を發揮することに努むると同時に、ス・フ工業、人絹工業等への轉換——所謂纖維工業の化學化に、その進路を求む可く、下級綿製品の生産は、勞銀低廉にして原料も豊富、しかも尠大なる需要力を有する綿業立地の好條件を完備した支那、滿洲國へ譲る可きが至當であると考へる。

勿論、これが經營は、我國の資本及び技術に俟つべきは言ふまでもない。英米人、支那人が、紡績經營に如何に無能なるかは、過去の事實によつて證明済みである。

而して、斯の如き綿業生産力の適地移轉は、即ち、日滿支經濟プロツクの機能を眞に活かし、圓プロツクの經濟的繁榮を培ふ所以なのである。

例へば、他日、綿製品の生産過剰により、操短の必要を生じた場合、優秀なる内地の紡機は、これを全運轉し、操短は、能率の低い大陸紡機に於て行ひ、過當なる資本の遊休を防ぐ如き、綿業の大陸化によつて、始めて行ひ得る利點である。

これを要するに、綿業の大陸化とは、圓プロツク内に於ける綿業の合理的分業の謂ひであつて、これに依つて、わが綿業は、新たな發展力を與へられ、世界最大の綿業

露光量違いの為重複撮影

391
72

昭和十三年十二月六日印刷 (金十銭)
昭和十三年十二月九日發行
東京市麹町區靈ヶ園三丁目三番地
編輯發行人 石山 善男
東京市麹町區靈ヶ園三丁目三番地
印刷 人 飯野 虎吉
東京市麹町區靈ヶ園三丁目三番地
發行所 編輯 ダイヤモンド社

國たるの實を備ふるに至るべきを確信するものである。

終

